作文コンクール

全国豊かな海づくり大会 会長賞受賞 農林水産大臣賞受賞

9月16日、17日に厚岸町で「第42回全国豊かな海づくり大会　北海道大会」が開かれました。

この大会行事の一環として行われた児童・生徒作文コンクールの小学校高学年の部において、庶路学園6年の音喜多麻那さんが最高位となる「全国豊かな海づくり大会会長賞」を受賞。続く「農林水産大臣賞」を茶路小学校6年の塚田柾君が受賞しました。

今月号では、受賞した二人の作文（原文のまま）を掲載します。

大会会長賞

できるだけ魚が増えるように！

庶路学園6年　音喜多　麻那

私はある日、お父さんに誘われて釣りに行くことになった。最初は「釣りなんてめんどくさい」、「どうせ釣れないし」と思っていた。だが、行ってみると海は青くきれいで、空は雲があまりなく、すんでいて気持ちよかった。お昼近くになってもなかなか釣れなくて、「暇だなー、帰りたいなー。」と思っていた。帰る時間になって片付けるために竿を上げると、なんとカレイの赤ちゃんが釣れていた。私は嬉しくて飛び跳ねた。するとお父さんが、「よかったな。でも小さいから海に返そう。返したら何かいいことがあるかもしれないよ。」と言った。私は驚き悲しかった。せっかく釣れたのに、と思ったし、良いことなんて起きるのかなと不思議だった。

そこで私は調べてみた。なぜ小さい魚を逃がすのか。資料を探してみると、世界全体で獲れている魚の数が減っていることが分かったが、小さい魚を逃がすのとは関係ないのではないかと思った。しかし、さらに調べていくと、漁師さんたちの考え方が少しずつ分かってきた。小さい魚を海に返すのは、小さい魚はお店で出しても売れないし、食べるところも少ないから捨てられてしまうそうだ。しかし、小さい魚を海に返すと、いずれ成長して大きくなって、オスなら食べるところが多くお店で喜ばれ、メスなら卵を産んでまたどんどん魚が増える。良いことがあるのだ。

他にも、網の大きさを制限したり、獲る量を制限したり、船の大きさによって獲る量を決めることで、魚を獲り過ぎることを防げる。さらに、例えば小さい船の漁師みんなが困らないように、助け合ったりしているそうだ。私はこれらのことを知って、漁師さんたちがこのような工夫をしているから、私たちもできるようなことを工夫してやりたいと思った。小さい魚を海に返すと、良いことがあるのだ。

「魚を増やそうとか考えたことがなかったけれど、いろいろと調べて考え方が変わりました」と音喜多さん

私はまた、お父さんと釣りに行った、今度も最初は釣れなかった。だが最後にまた小さなカレイが釣れた。この前釣った赤ちゃんガレイが少し大きくなった気がした。お父さんが、「この前逃がしたのが大きくなったんだな。」と嬉しそうに言った。けれども私は、まだ小さいから、お父さんに言われる前に海に返した。帰りの車の中で、自分が魚を増やすことに協力したんだなと思うと気持ちが良かった。

農林水産大臣賞

白糠の海を守る

茶路小学校6年　塚田　柾

ぼくが住んでいる白糠町は、人口約七千二百人が住んでいる農業と漁業がとても盛んな町です。白糠の海では、鮭やシシャモ、毛ガニなどがたくさんとれています。ふるさと納税の返礼品として全国でよく知られています。しかし今、白糠町の海には異変が起きています。盛んにとれていた鮭やシシャモなどの魚が記録的不漁になっているからです。

不漁の原因は、海洋汚染や地球温暖化などの環境問題です。今、世界的に地球温暖化や海洋汚染が問題になっていて、白糠町でも海や砂浜にたくさんのゴミが打ち上げられています。海洋汚染とは、人間によって引き起こされる海の汚染のことです。プラスチックなどの廃棄物などの投棄、石油の流出などが主な原因となっています。なぜ海洋汚染が魚の不漁の原因になっているかというと、海洋ゴミや、化学物質、油の流出などが原因で大量の魚が死んだり、大きさが小さくなったりするからです。

白糠町では、白糠高校の総合的な学習の時間で海岸に漂着したゴミを拾い、分別し、どのようなゴミが多いかを調査しています。一時間の活動で、約二百七十キロものゴミが見つかりました。調査では、ペットボトルなどのプラスチック類が多いことが分かりました。

また、森林などの自然を豊かにすることも大切だと思います。なぜかというと、山に雨が降り、地面に水が染みこみ、川や海に流れ出します。ですので、自然がきれいだと流れ出てくる水も栄養素が豊富なきれいな水になるからです。そのためには、自然をきれいにしなければいけないので森林を守るということにもつながります。白糠に木を植え、伐採し、白糠で使用するという循環を繰り返すと良いと思います。この循環を繰り返せば、林業も盛んになり、魚も生息しやすくなるため、一石二鳥なのではないでしょうか。このような取り組みを行っている場所として、ぼくが以前住んでいた厚岸町では、植樹活動を行っています。厚岸町の基幹産業は白糠と同じく漁業です。特に、山から流れ込む栄養素が豊富な水を使ったカキなどの養殖業が盛んになっています。厚岸町では、森林を守るために木を伐採して、厚岸で使い、再び植えるという取り組みを長年行っています。このような取り組みをしているから、栄養素豊富なきれいな水が海に流れているのだと思います。

また、海にあふれているたくさんのゴミを減らすには、海にゴミを捨てたり、ポイ捨てをしたりしないという根本的なことを心がけていくことも大切だと思います。物を大切に使いゴミを減らす「リデュース」、物を繰り返し使う「リユース」、ゴミを資源として再び使う「リサイクル」の３Ｒも必要になってくると思います。リサイクルでは、ゴミを完全になくすということは難しいため、白糠町を「エコタウンの町」にするのはどうでしょうか。使われなくなったビンを砕き、再びビンにしたり、プラスチックを繊維にして服にしたりとリサイクルをする施設を集め「エコタウン」にするとよいと思います。このような取り組みをすることによって、白糠町、北海道の未来につながっていくのではないのでしょうか。

ぼくの大好きな白糠町。白糠の海でたくさんの海産物がとれてもっと漁業が盛んになることを期待しています。そのために、植樹をして、緑を循環させたり、エコタウンをつくったりすることが今できることで大切なことです。ぼく自身も環境汚染や漂流ゴミなどについて知って、より考えていけたらいいなと思います。

「海の現状を少しでも改善できればと思いました。厚岸の祖母も受賞を喜んでくれました」と塚田君